

五月の初め、理由を記した封書が秀次郎の元へ届いた。便箋に包まれて、写真が三葉入っている。いずれもイミエジ基地にあった戦闘司令部が写っている。爆撃のたびに何度も破壊され修復を繰り返した建物である。丸裸になっていた周囲には再び椰子林がよみがえり、<sup>つた</sup>蔦におおわれた司令部の外観を林の間から撮ったものが二葉、それに暗い内部をのぞく入口の写真だった。

大助は短く次のように綴っていた。

ヤルトの島々を巡拝するうちに、島民から司令部にまつわるちょっとした怪談を耳にするようになった。一步中へ入ると、奥から銃声が聞こえるというのだ。観光局は司令部を撤去するつもりでいるが、工事を引き受ける業者がないので写真のような状態で今日まで残されている。自分とヤクネ氏は現地の島民に案内され司令部を訪ねたが、島民は気味悪がって近づこうとしない。中へ入ると悪いことがおこるので、入口までにしてくれと二人を引き止める。本当に銃声がするのかどうか確かめてみたかったが、島民の気持ちを考え入口をのぞくだけにした。

その日、自分は一晩眠れずにいた。夜明けとともに頭に浮かんだのは、地藏菩薩を祀るお堂の建設だった。場所はアイネマン島の火葬場跡である。ヤクネ氏に相談すると、かれは気持ちよく賛同してくれた。島民たちからの許可もおりたので、いま工事にとりかかっている最中である。十人ほど島民を雇った。その中の二人は日系の青年で、特別によく働いてくれる。嬉しいが、一方で複雑な心境にもなる、と大助は手紙を結んでいた。

「あれはコルト式拳銃だった……」

秀次郎は便箋をもつ手に視線を落とした。杉山から奪いとった拳銃の感触をいまも手のひらが覚えている。

進駐してきたアメリカ軍の駐逐艦上で降伏文書に調印し、イミエジ基地広場に星条旗が翻った日に、杉山は将校を集め、「皇国の将軍が生きて敵の軍門に降るのはいさぎよいことではない。敗戦の責任を取って自決するから後を頼む」と決意を述べた。表立って反対する者はなかった。杉山が部屋を出ていくとあちこちで<sup>おえっ</sup>嗚咽する声があがった。

そこから自決を予告した日まで、志村は執拗に司令の部屋を訪れ、翻意するように説得に努めた。杉山こそ、危ぶまれていた国体の護持と国家再建のためになくてはならない人物だと志村は信じていた。捕虜や島民の処刑問題で、杉山や志村が「戦犯」の訴追を受けるようになるとは、このとき考えも及ばないことであった。

予告の日、基地は朝から異様な静けさの中にあった。寝つかれないままベッ

ドを下り、ぐるぐる室内を徘徊していた志村は、ドアをノックする音に足を止めた。

「大隊長！」

と中田の押し殺した声がしじまを破る。

ドアを開け、中田を中に入れた。

「いま、拳銃を手渡してきました」

と中田はこわばった顔で告げた。

かれは昨夜、特務班の大尉から秘かに所持していた拳銃の手入れを命じられた。分解し隅々まで磨き上げた一挺が、いまごろ大尉の手で司令室に届けられているはずだと中田は直立不動の姿勢で一気にいう。顔面は蒼白である。

「弾は一つか」

「はい、そのように命令されました」

「何時だ」

「八時……」

中田は頭<sup>こうべ</sup>を垂れた。

五分前だった。

「よし、おれが介錯をする」

志村は叫び、中田を押しの外へ飛び出した。無我夢中で司令所へ走った。司令室に押し入ると、天井から吊り下げた白布を胴体にぐるぐる巻き付けた司令が椅子に腰を下ろしこめかみに拳銃を当てたところだった。司令はその姿勢で一瞬、志村を凝視し、何かいおうとしたように思えた。志村がひるんだその瞬間、轟音がかれを打った。その直後のことはよく覚えていない。志村は床に崩れ落ちた司令の身体を起こし、司令の重みで引き千切られ垂れ下がった白布から鮮血が床へこぼれ落ちるのを見つめていた。

司令所跡にいまも聞こえる銃声は、このときのものなのだろうか。それが島民の幻聴だと一笑できないのは秀次郎も中田と同じ思いであった。

翌朝から、秀次郎はほこらへ司令所の写真を持参し、いつもよりもていねいな礼拝を続け、地藏菩薩堂の完成を願った。

ところで、ほこらへ出かける時間があきらかに遅くなりはじめたのはこの頃からである。帰りぎわには石段の途中で登山会の老人たちとかならず出会う。秀次郎はぞろぞろ登ってくる老人たちときこちない挨拶をかわした。やがて秀次郎のほこら参りに気づいたかれらは「ご苦労様です」とか「おかげさまですな」と声をかけてくるようになっていた。

中田が帰国したのは六月の初めだった。

かれは二三日おきに秀次郎のところへ顔を出し、話しこんで帰る。秀次郎も

散歩の途中で何度となく大助の家に入り込み、応接間で旅行談をあれこれ聞いた。

松岡のことはついにわからなかった。が、ヤルートで戦場となった島々を巡拝し、地藏菩薩堂を建立した大助は旅行の成果に十分満足していた。さらにかれは、先に秀次郎を訪ねてきた女性記者から新聞にヤルート巡拝の旅行記を書くように依頼を受けていた。彼女からは秀次郎に関する話が出なかったようである。そのことにいさかひっかかりを覚えているかれは、大助から旅行記の相談を受けたりするとさすがに内心面白くなかった。そして大助が口癖のように「もういつお迎えが来てもええですから」というのを聞くと、秀次郎はまた一人おいていかれるような焦りと淋しさを味合わされるのであった。



挿絵 (M. Tasaka)

梅雨の季節で、雨模様の朝が続いたが、秀次郎は傘をさし、ほこらへ通った。雨足が衰えるのを待つてほこらへ出かけた朝は、山頂から下りてきた雨がつば姿の老人たちが秀次郎に追いついた。「足元がすべるからきいつけなさいや」と声がかかる。石段に立ち止まり、かれらをやり過ぎた秀次郎は、雨に煙る街並みをながめながら、来年はもうこの石段を登れないかもしれんと弱気になった。